

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「武道の教育論序説」

佐藤 雄哉

氏 名 佐藤 雄哉  
学位の種類 博士(体育科学)  
報告番号 甲 第52号  
学位授与年月日 平成31年3月20日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
学位論文題目 武道の教育論序説  
論文審査委員 (主査)教授 井上 誠二  
(副査)教授 角田 直也  
(副査)教授 阿部 悟郎(東海大学教授)

### 博士論文の要旨

題 目 武道の教育論序説

氏 名 佐藤 雄哉

## 論文の和文概要

学位申請者氏名	佐藤雄哉
学位論文題目	武道の教育論序説
<p>本研究の目的は、武道の教育的価値を現在の視点から考察するものである。そしてそれは、文化変容に直面する身体技法としての武道の本来性について再評価する試みでもある。本研究は、1章柔道の文化論、2章武道の教養論、3章武道の教育論から構成される。本研究は、以下のように要約されよう。</p> <p>1章「柔道の文化論」は、伝統文化を継承する柔道とスポーツ化された Judo とのパラドックスを理論的に考察することを課題としている。それは柔道と Judo のパラドックスそのものが特徴付ける武道の奥深さ、すなわち文化変容に直面する身体技法としての柔道の本来性について再評価する試みでもある。「伝統とは長い年月を経たものと思われ、そう言われているものであるが、その実往々にしてごく最近成立し、時に創られたものである。」E.ホブズボウムは伝統の多くは近代に於いて創り出されたものであり、同時にそれは過去からの連続性を暗示しているとする。日本の伝統文化である武道の先駆けとして、1882年嘉納治五郎によって創設された柔道は、日本古来の文化を尊重しつつ、近代社会への適応が可能な新たな伝統を創設することを目的としたのである。心身修養システムとして創設された柔道と勝利を追求する競技として発展した Judo の理念上のパラドックスは、くしくも逆方向に作用するベクトルの特性を鮮やかに映し出している。嘉納による柔道創設の理念の根底には、伝統文化の伝達と同様に、柔道を世界に開放するという一貫した国際性の追及の立場が説かれていたとされる。柔道と Judo のパラドックスという問題を考えるにあっては、嘉納の理念に寄り添い、柔道を世界に開放したことへの意義に注目する必要があるだろう。すなわちこのような問題に対して、柔道は改めてその一貫した連続性を示すことが求められているのである。「柔道が JUDO を解き放つ」という今福の言葉を借りれば、嘉納の理念を再評価し、Judo が内包する柔道の本来性を見つめ直しそれを世界に解放することが課題であろう。</p> <p>2章「武道の教養論」は、文化変容に伴う武道の現在の課題について議論しつつ、身体技法としての武道の本来性を再評価することを課題としている。嘉納治五郎は、日本古来の文化を尊重しつつ、近代社会への適応が可能な柔道の新たな伝統を創設することを目的としたのであるが、そこには過去からの一貫した連続性を見ることができよう。そしてその後の柔道の急速な国際化は、伝統文化としての柔道とスポーツとしての Judo という一見対峙する二つの概念を生み出すことにもなる。よって、伝統と国際化という安易な二項対立を超えて、柔道は改めてその一貫した過去からの連続性を提示する必要があるだろう。武道は、日本の教育的なシステムを含んだものとされるが、そこでは教育の枠組みにおいて一般に認められている道徳的発達への効用と併せて、その身体技法としての有用性に注目する必要がある。「稽古」と呼ばれる武道の練習には、長年育まれてきた文化、さらに言えば思想が内在しているとされるが、武道の身体技法を通しての伝統文化の理解は、人間形成における基本的な視点であり、それは柔道を世界へ開放するという嘉納の一貫した立場からも窺うことができる。武道の身体技法としての本来性とその教育的価値は、文化変容を経ても尚、現世代へと継承され続けなければならないものであり、よって武道の現在の課題を考えるにあっては、文化変容に直面する武道の本来性について再評価することが重要であろう。</p> <p>3章「武道の教育論」では、武道の文化的特性と教育的価値を身体技法の視点から考察することを課題としている。そしてそれは、武道の実践を通して獲得される身体的教養を現在の視点か</p>	

ら再評価する試みでもある。またその試みは、武道の身体技法を通しての伝統の理解が一定の教育的意義を有すると共に、人間形成における基本的な視点であることを示すものである。文化的に集積された身体の使い方は身体技法と呼ばれるが、武道の稽古には長年育まれてきた文化、さらに言えば思想が内在しており、そこでは身体技法を通して伝統的な考え方に触れることが可能であるとされる。また、身体技法における知の文化的異同という視点は、身体の教育という現在の教育問題に対峙する論拠を導くものでもあり、今一度その価値を認識する必要があるだろう。武道の身体技法は型により定型化され、その基本の形を示すものとされるが、礼義作法の型は武道において特に重視されるものでもある。礼やマナーを文化維持装置と考える時、そこには礼やマナーがもつ特性の広がりが見えてくるのである。すなわちそれは、いわゆる文化的なしくみとしてのルールといってもよいであろう。武道は創設と同時に人間形成をその目的に付与された教育概念であるが、身体技法を通じた作法やマナーの習得は、身体レベルでの自文化理解に資するものであり、よってそれは現代社会における武道の教育的価値を議論する上で、重要な課題でもあろう。身体技法としての武道の本来性とその教育的価値を再評価する試みは、教育という営みにおける現在の課題を考えるにあって意義あるものとなろう。そしてそこには、身体レベルでの自文化理解に資する教育概念としての武道の在り方とそれを世界に解放することの重要性が展望されるのである。

論文の英文概要

Name	Yuya Sato
Title	An introduction to the educational theory of Budo
<p>The purpose of this study is to discuss on the educational value in Budo from the viewpoint of current issues. It is also an attempt to re-evaluate the originality of Judo as a bodywork technique facing with a cultural change. The study is composed of the following chapters: 1) theory of Judo culture, 2) cultural theory of Budo, 3) educational theory of Budo, The study is summarized as follows.</p> <p>The issue of chapter 1 (theory of Judo culture) is to consider the paradox between Judo as traditional culture and Judo as internationalized sport. It is also an attempt to re-evaluate the originality of Judo as a bodywork technique facing with a cultural change. "Traditions which appear or claim to be old are often quite recent in origin and sometimes invented." E.Hobsbawm declares that many of traditions are created in modern times, and those inevitably imply the continuity from the past. Since Judo was created by Jigoro Kano in 1882, it has increasingly become popular with worldwide. He respected traditional culture and tried to adapt its form in modern society to create a new tradition. Thus, a theoretical paradox between Judo as mind-body training system and Judo as a competition in order to pursue the victory clearly reflects the contrary vector. It is said that there may inherent in the origin of Kano's consistent stance for internationalization of Judo in addition to succeeding traditional culture. In considering the issue of the paradox between Judo as tradition and Judo as sport, it is necessary for us to note the significance of Kano's idea opening Judo to the world. Yet, Judo needs to present the consistent continuity from the past traditions again. To borrow Imafuku's word "JUDO may open Judo", it might be a task to re-evaluate Kano's idea and also to open the originality of Judo inherent in Judo.</p> <p>The issue of chapter 2 (cultural theory of Budo) is to examine the traditional thought inherent in the bodywork technique in Budo and discuss current issues surrounding it. In addition, this is an attempt to reevaluate its originality as a bodywork technique facing cultural change. Even though Jigoro Kano respected traditional culture and tried to adapt it to modern society to create a new tradition in Judo, a coherent continuity is clearly visible in the developmental process. In addition, such a rapid internationalization has produced apparently opposite concepts: Judo as a traditional culture and Judo as sport. Yet Judo must present a logical connection with the past to move beyond the dichotomy of tradition and internationalization. Budo forms part of the Japanese educational system, and we must carefully examine the bodywork technique's usefulness, as well as how it benefits moral development in the educational context. In addition, the Budo training called "Keiko" mainly involves mastering several techniques and contains culture cultivated over the years as well as the philosophy by which we can feel and touch traditional ideas through bodywork technique. Understanding traditional culture through the Budo bodywork technique is the basic viewpoint in human formation, which is seen from Kano's consistent stance in promoting Judo to the world as traditional culture. The originality of Budo as bodywork technique and</p>	

its educational values must be passed on to the present generation despite cultural change; even then, it is necessary for us to reevaluate the originality of Budo as it faces cultural change and reflect on current issues relevant to it.

The issue of chapter 3 (educational theory of Budo) is to discuss on the cultural dimension and educational values in Budo in terms of the bodywork technique. It is also an attempt to re-evaluate the bodily culture cultivated through Budo training as a current issue. This attempt may indicate that understanding of tradition through bodywork technique in Budo has a certain educational significance and is a basic viewpoint in the field of human formation. Use of the body integrated into culture is called as bodywork technique and in Budo training there exists the culture cultivated over the years, as well as the philosophy in which we can feel and touch traditional ideas through bodywork technique. In addition, acknowledging the perspective of cultural differences within the training may guide to understand the current issues for education of the body, yet it is necessary for us to recognize the importance of the value again. The bodywork technique in Budo is stylized by Kata at its most basic, then Rei and manner is an important practice of bodywork in Budo. In considering Rei and manner as equipment to maintain culture, there can be seen the extent of their properties. That is to say, it is a rule or cultural mechanism. Budo is an educational concept invested with its purpose of human formation since established. The acquisition of Rei and manner through the bodywork technique in Budo encourages to understand the own traditional culture. It would be a vital issue in discussing the educational value of Budo in modern society. An attempt to re-evaluate the originality of Budo as bodywork technique and its educational values might be meaningful. And it would be predicted to consider on what Budo as educational concept should be and on the importance of releasing it to the world.

氏 名 佐藤 雄哉  
学位の種類 博士(体育科学)  
報告番号 甲 第52号  
学位授与年月日 平成31年3月20日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
学位論文題目 武道の教育論序説  
論文審査委員 (主査)教授 井上 誠二  
(副査)教授 角田 直也  
(副査)教授 阿部 悟郎(東海大学教授)

### 博士論文審査結果の要旨

題 目 武道の教育論序説

氏 名 佐藤 雄哉

国土館大学

学 長 佐 藤 圭 一 殿

主任審査員

氏 名 井 上 誠 治



## 論文審査結果の要旨

学 籍 番 号	16 - DD001	平成 28 年 4 月 1 日入学
学位申請者氏名	佐藤 雄哉	
学位論文題目	武道の教育論序説	
論 文 審 査 結 果 の 要 旨	<p>本学位論文「武道の教育論序説」は、1. 柔道の文化論、2. 武道の教養論、3. 武道の教育論という視点から、武道の現在的な教育課題について考察したものである。</p> <p>1 章「柔道の文化論」では、伝統文化を継承する柔道とスポーツ化された Judo との理論的パラドックスについて考察することを主題としている。そしてそれは「伝統とは長い年月を経たものと思われているが、その実往々にしてごく最近成立したものである」という E. ホブズボウムの主張を手掛かりに、伝統文化としての柔道が継承する過去からの連続性、すなわち柔道の奥深さ、あるいは身体技法としての柔道の本来性について問うたものでもある。また心身修養システムとして創設された柔道と勝利を追求する競技として発展した Judo の理念上のパラドックスは、くしくも逆方向に作用するベクトルの特性を鮮やかに映し出しているとされるが、この問題を考えるにあっては、嘉納の理念に寄り添い、柔道を世界に開放したことへの意義に注目する必要があるとする。そして嘉納の理念を再評価し、Judo が内包する柔道の本来性を見つめ直すことが課題であると結論する。</p> <p>2 章「武道の教養論」では、文化変容に伴う武道の現在的課題について議論しつつ、伝統と国際化という安易な二項対立を超えて、身体技法としての武道の本来性を再評価することを主題としている。そして武道は、日本の教育的なシステムを含んだものとされるが、そこでは教育の枠組みにおいて一般に認められている道徳的発達への効用と併せて、その身体技法としての有用性に注目する必要があるとする。また稽古と呼ばれる武道の練習には、長年育まれてきた文化、さらに言えば思想が内在しているとされるが、武道の身体技法を通しての伝統文化の理解は、人間形成における基本的な視点であり、それは柔道を世界へ開放するという嘉納の一貫した立場からも窺うことができる。そして文化変容に直而する武道の教育的価値は、現世代へと継承されなければならないものであり、よって武道の現在的課題を考えるにあっては、身体技法としての武道の本来性について再評価することが重要であると結論する。</p> <p>3 章「武道の教育論」では、武道の文化的特性と教育的価値を身体技法の視点から考察することを主題としている。そしてそれは、武道の実践を通して獲得される身体的教養を現在的な視点から再評価する試みとされる。また文化的に集積された身体の</p>	

使い方は身体技法と呼ばれるが、身体技法における知の文化的異同という視点は、身体教育という現在の教育問題に対峙する論拠を導くものでもあり、改めて厳密に議論する必要があるとする。また武道の身体技法は型により定型化され、その基本の形を示すものとされるが、礼義作法の型は武道において特に重視されるものでもあり、そこには文化維持装置としての礼やマナーがもつ特性の広がりが見えてくるとする。さらに武道は創設と同時に人間形成をその目的に付与された教育概念であるが、身体技法を通じた作法やマナーの習得は、身体レベルでの自文化理解に資するものであり、よってそれは現代社会における武道の教育的価値を議論する上で、重要な課題であるとする。そして身体技法としての武道の本来性とその教育的価値を再評価する試みは、現在の教育課題を考える上で重要であり、そこには教育概念としての武道の在り方とそれを世界に解放することの重要性が展望されると本学位論文を結論する。

本学位論文は、伝統文化である武道の教育的価値を掘り起こし、身体技法としての武道の在り方をマナーの問題、あるいは人間関係の理論として新たに展開したものであり、体育・スポーツ哲学分野はもとより、体育学、教育学の領域における斬新な研究として評価される。武道学、身体哲学および教育哲学を中心とする豊富な文献検索と文献講読に裏打ちされた本学位論文は、武道の教育可能性を文化論的に解明したオリジナリティー溢れる研究として、今後の確かな発展可能性を窺わせるものである。以上より、本学位論文を当該分野の学術的發展に寄与する価値ある研究成果として高く評価するものである。

※2000字程度

様式 A (課程博士用)